様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３７４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００６６

研究課題名（和文）幕末維新期の陽明学者吉村秋陽・吉村斐山の未刊文書の翻刻と研究

研究課題名（英文）Reprinting of Unpublished Documents from Yoshimura Shuyo and Yoshimura Hizan and Research on These Scholars of the Wang Yangming School in the late Edo and early Meiji

研究代表者
荒木　龍太郎（ARAKI, RYUTARO）

活水女子大学・国際文化学部・非常勤

研究者番号：９０１２４１６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幕末維新期の陽明学者吉村秋陽（1797～1866）・吉村斐山（1822～1882）の未刊文書の主要な「読我書楼長暦」（日記）と「読我書楼文草」（明治15年刊『読我書楼遺稿』の草稿）の解読と翻刻を行い、陽明学受容の解明をすすめた。上記の未刊文書はテキスト入力までを終了し、逐次活字化している。また同時に「文草」の「随筆語録類」、格物致知論などを考究した結果、秋陽が陽明思想解釈に新たな視点を開拓し、幕末維新期の日本王陽明学の独自性を明示していることを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究はこれまでの、「幕末維新期陽明学」は、陽明思想ではなく明末の劉念台（1578～1645）思想の影響が強いという漠然とした認識を修正した。即ち吉村秋陽が、念台に依拠するのではなく、陽明門下の歐陽南野（1496～1554）の「人心生意流行而変化無方所謂意也。」（『明儒学案』巻17）などの概念を梃子にして新たな王陽明思想解釈を提示したことを明確にした。この秋陽の認識は今後の内外の日本陽明学研究に寄与すると言える。また未刊テキストの翻刻、活字化は、幕末維新期の陽明学思想研究、日本思想研究の進展のための基礎データとして社会的に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：This study interpreted and reprinted “読我書楼長暦” (a diary) and “読我書楼文草” (a rough draft of Reading My Books Again: Posthumous Writings published in 1882). These major unpublished documents are from Yoshimura Shuyo (1797-1866) and Yoshimura Hizan (1822-1882), who were scholars of the Wang Yangming school in the late Edo and early Meiji period. This work has also helped to elucidate how the Wang Yangming school was received. The text of these unpublished documents has been input, and the documents are being successively put into print. This study has also examined “recorded sayings in essays” in “文草” and the theory of “obtaining knowledge by investigating things,” revealing how Shuyo opened up a new perspective in interpreting Yangming’s philosophy and clearly indicating the uniqueness of the Japanese scholars of the Wang Yangming school in the late Edo and early Meiji period.

研究分野：中国哲学　宋明思想　陽明学　日本思想

キーワード：吉村秋陽　幕末維新期　日本陽明学　読我書楼長暦　読我書楼文草　格物致知誠意　王陽明　劉念台

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2020 年の開始時点では、東アジアの儒教に関する内外の研究に於いて、幕末維新期の陽明学については甚だ少なく、また国内の研究で言及はあるものの陽明学者の思想の精密な内容、陽明思想の理解と受容の実態となると研究は低調であった。

本研究に於ける幕末維新期の陽明学者は佐藤一斎（1772～1859）の信頼が厚かった吉村秋陽（1797～1866）をはじめとして、吉村斐山（1822～1882）、池田草庵（1813～1878）、林良斎（1807～1849）や春日潜庵（1811～1878）、東沢瀉（1832～1891）などである。今日、彼らは一括して「陽明学者」として認識、言及されている。

しかし思想研究に関しては王陽明（1472～1528）思想と劉念台（1578～1645）思想との区別が明瞭にされていなかった。その大きな原因は、吉村秋陽・斐山の未刊の資料の整備が不十分であり、秋陽の陽明思想受容を正確に解き明かすことができなかったことである。

２．研究の目的

本研究は、停滞する幕末維新期陽明学の研究状況を進展させるべく、その中核となる秋陽・斐山の未刊文書を解読、翻刻して研究の基礎データの構築に向けての作業を行う。

それを踏まえて秋陽の陽明思想受容を明確にし、他の念台思想支持の陽明学者との比較検討を行い「幕末維新期の日本陽明学」の正確な規定を行う。更に中国における陽明学の展開の様相と比較して「東アジアの思想」という観点からも考察する。加えて「幕末維新期日本陽明学」と明治から現代までの「陽明学」とどのように関係するのか、その諸相の解明を進める。これらにより新たな研究視角を提示する。

３．研究の方法

研究分担者と協同で未刊文書の中核となる『読我書楼長暦』〔秋陽 33 才・文政 12 年 1829 年から卒年 70 才・慶応 2 年 1866 年までの 38 年間の日記。以下、「長暦」と略。〕と「読我書楼文草」〔『読我書楼遺稿』の草稿。以下、「文草」と略。〕を解読、テキスト入力、活字化を進め、日本陽明学研究を活性化するのための基礎データの整備作業を進める。それらの資料の解読から吉村秋陽の陽明思想受容と解釈を究明する。それに基づき幕末維新期の「日本陽明学者」の実態、また明治以降の「陽明学」との関係を考究する。更に中国明代思想の中で考究し、「東アジアの思想」の中での独自性を考察する。

４．研究成果

（１）翻刻作業の方面：

①秋陽の『読我書楼長暦』38 年間全部のテキスト入力を終え註釈を付し 33 才～39 才までを活字化した。

②秋陽の文稿「読我書楼文草」（後に整理されたものが、慶応３年に斐山により謄写され、明治 15 年刊『読我書楼遺稿』はその 3 割である。）を読解し、全部のテキスト入力のを終え、註釈を付して順次活字化に進んでおり、基礎的データの整備への態勢を確立した。斐山資料については、テキスト入力は終了していないが解読は終えている。

進捗状況としては最も時間を要する「読我書楼長暦」「読我書楼文草」の解読・テキスト入力が終り、活字化の作業に至っているので、今後、活字化による基礎データの整備充実が進展することが可能となった。

（２）日本陽明学解明の方面：

秋陽の「読我書楼文草」、格致論争関係（50 才～55 才）資料を中心として調査、考察を行った。「文草」中の「随筆語録類」（９７条中７１条が未刊）を確認、研討した結果、秋陽は陽明思想の「当下」「無善無悪」（58 才）、「渾然一体」（61 才）を肯定していることが確定できた。そして陽明門下の歐陽南野（1496～1554）の「人心生意流行而変化無方、所謂意也。」（『明儒学案』巻 17）を自著『王学堤綱』（巻下：66 才）に引いて「蓋意也者此心生生之幾、有嗡張而無断続者也。」と述べ独自に展開した。この主張は歐陽南野の意説を吸収して陽明思想解釈を深化、発展させたものと言え、晩年に鮮明に表現されるが一斎従学以来、一貫している。

この見地から秋陽は、念台が陽明の「意（＝意念）」は「生滅浮遊する念」を分離しないので主宰性が曖昧であると批判したことに関して、「意者良知生生闔闢之真機、妙用無息、而常体不易。」（「格致賸議」）と述べた。「意」の主宰性を明確化し、念台思想支持の大橋訥庵（1816～1862）との一連の格致論争（格致賸議一論格致賸議一弁復書）において反論を展開したのである。

「文草」の「随筆語録類」の内容（当下・無善無悪・渾然一体）は、陽明思想の基本線に立脚していることを明瞭に示している。したがって訥庵の「論格致賸議」批判、それに対する秋陽の反論「弁復書」と継続する「格致論争」の解明もそのことを前提に進める必要がある。

秋陽は佐藤一斎の陽明学受容の傾向を継承して王龍渓（1498～1583）などの「良知現成」を評価せず、また「帰寂」を説く念庵、双江などを否定しない。そして秋陽は、「生生之機」に着目して「陽明思想は念台思想を包摂する」という独自の視点を展開しており、明末思潮に照らしても特異性を示している。今日の王陽明・劉念台研究に於いても新たな視点を与えることが明らか

となった。これはまた陽明学の「東アジア」に於ける展開を示すものであり、今後の内外の研究に示唆を与えるものである。

また上記の研究過程で、新たな課題が浮上した。それは秋陽の陽明思想受容を検討するときに池田草庵の影響の有無の検討が必要ということである。つまり、これまで、念台を支持する草庵の見方に引きつけられていた可能性がある、ということである。

刊行本『読我書楼遺稿』は草庵の助言を得て「文草」を三分の一に編輯されたものである。「文草」には「随筆語録類」があり、秋陽が陽明思想の受容と展開を明瞭にしている。しかし刊行本にはその部分が未収である。加えて「文草」には陽明思想を受容した大塩平八郎への書簡稿が含まれる（「読我書楼長暦」天保 4 年 10 月 7 日、11 月 11 日、12 月 24 日に書簡の往復を確認できる。）が、刊行本では省かれている。

これらの不選択には、念台思想支持の草庵の影響が想定される。秋陽に関する研究が、主に『読我書楼遺稿』に依拠してきたことを勘案すると、秋陽の陽明学受容に対する理解が左右され、その結果不十分曖昧な「日本陽明学」理解となってしまったのではないか、更に検討する必要が生じている。

加えて、維新の前後では陽明学に対する意識が変化していることが明らかとなった。「陽明学」の語は、幕末の横井小楠「遊歴聞見書」、吉田松陰「己未文稿」にも見られる。しかし秋陽、草庵などの「幕末維新期陽明学者」は、陽明思想研究に於いては「王学」と称するが「陽明学」の語は殆ど用いない。例えば秋陽の著書も『王学堤綱』である。

「陽明学」の語そのものは 1556 年（鄭曉『今言』）には現れており、『明史』『明儒学案』にも見られる。これらは「幕末期の陽明学者」も目にしていた可能性が高い。何故「王学」であったのか。秋陽の「格致臆議」は、明治期に吉本襄の雑誌『陽明学』（明治 29 年）に掲載されてはいるが、吉村斐山（秋陽の養子）は、草庵に今日「儒教の経籍の修業に及ぶ者はいない」と述べ、明治 13 年家塾を廃業し、秋陽の孫・彰（号は白斎・1853～1908。広島師範が学校に奉職。明治期の教育者）が「漢学専門修業志願者」に限定して「漢学専門留正書院」を開塾（明治１３年）せざるを得ないほどの状況に「王学」を取り巻く環境は激変していた。

彰は『王学雑誌』（明治 39 年・秋陽の弟子の東沢寫の嗣子・東敬治の雑誌）に「陽明学の大意」「陽明学問答」（明治 40 年 11 月 15 日『王学雑誌』第 2 巻 9 号）を掲載する。ここで彰は「知行合一の本旨」を的確に把握し、陽明心学と禅の心学との相違が「理」の有無にあると認識し、朱子学の『大学章句』の長所を指摘し、陽明学を朱子学、禅宗と比較するなど、客観的に検討、考察している。これには井上哲次郎の『日本陽明学派之哲学』（明治 33 年）の影響があったと想定される。同書の中で井上は「秋陽ひとたび王学を一斎より受けしより深く之を崇信し、終身其圏套中に留まれり。」と述べている。秋陽、子の斐山は「王学」、明治期の孫の彰は「陽明学」である。これは「日本陽明学」の幕末から明治近代への推移と展開の起点を示している。「崇信」の対象の「王学」から研究対象の「陽明学」への転換を表しているのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 荒木龍太郎	４．巻 64
２．論文標題 幕末陽明学者吉村秋陽の明末思想理解ー「格致よう議」を通して（一）ー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 活水日文	６．最初と最後の頁 76-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 荒木龍太郎・関幹雄	４．巻 64
２．論文標題 「読我書樓長暦」翻刻（四）ー九州大学附属図書館蔵「吉村文庫」の研究〔II〕ー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 活水日文	６．最初と最後の頁 44-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤井倫明	４．巻 2
２．論文標題 朱子心性論的建構与対《孟子》的詮釈	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中国心学	６．最初と最後の頁 91-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤井倫明	４．巻 0
２．論文標題 朱子的《孟子》詮釋與心性論的建構	５．発行年 2023年
３．雑誌名 第十二屆中國經學國際學術研討會論文選集	６．最初と最後の頁 303-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤井倫明・金培懿	4．巻 0
2．論文標題 「天」與「數」：佐藤一齋之命運觀探析	5．発行年 2023年
3．雑誌名 危疑時代的儒學思考	6．最初と最後の頁 297-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 荒木龍太郎・関幹雄	4．巻 63
2．論文標題 「読我書樓長暦」翻刻（三）ー九州大学附属図書館蔵「吉村文庫」の研究〔II〕ー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 活水日文	6．最初と最後の頁 72－116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎	4．巻 63
2．論文標題 日本における陽明学研究の継承と展開ー荒木見悟博士の宋明思想研究を通してー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 活水日文	6．最初と最後の頁 58－71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎	4．巻 65
2．論文標題 万暦期思潮における羅近溪の「本末格物説」の位置ー現成良知の諸相の観点からー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 活水論文集	6．最初と最後の頁 191－205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤井倫明	4．巻 0
2．論文標題 『仁』概念日本化的三種類型――以仁齋學、徂徠學、闇齋學為中心探討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『東亞思想交流史中的脈絡性轉換』臺灣大學研究中心	6．最初と最後の頁 27－44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤井倫明	4．巻 81
2．論文標題 牟宗三の宋明思想理解―「理」の解釈をめぐって―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 哲学年報	6．最初と最後の頁 107－127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎	4．巻 0
2．論文標題 荒木見悟先生明代思想史研究的意義	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『中国哲学的豊富性再現：荒木見悟与近世中国思想論集』（上海古籍出版社）	6．最初と最後の頁 206－234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤井倫明	4．巻 0
2．論文標題 荒木見悟先生宋明思想研究之特色――以其朱子学研究為探討中心	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『中国哲学的豊富性再現：荒木見悟与近世中国思想論集』（上海古籍出版社）	6．最初と最後の頁 156－187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎	4．巻 62
2．論文標題 幕末期陽明学者吉村秋陽の行状の紹介と解説	5．発行年 2021年
3．雑誌名 活水日文	6．最初と最後の頁 48～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎・関幹雄	4．巻 62
2．論文標題 『読我書樓長暦』翻刻（二）九州大学付属図書館所蔵「吉村文庫」の研究〔II〕ー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 活水日文	6．最初と最後の頁 57-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎	4．巻 61
2．論文標題 明末清初における王心斎格物説の変遷ー本末格物説の観点からー	5．発行年 2023年
3．雑誌名 九州中国学会報	6．最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎	4．巻 67
2．論文標題 陽明門下王龍渓の良知現成論と頓悟漸修論の考察ー王龍渓・張陽和・孟我疆・鄒南皋を軸にしてー	5．発行年 2024年
3．雑誌名 活水論文集	6．最初と最後の頁 215-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤井倫明	4．巻 1
2．論文標題 荻生徂徠之人観与教育論於当代之意義	5．発行年 2023年
3．雑誌名 当代儒学研究	6．最初と最後の頁 115-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤井倫明	4．巻 -
2．論文標題 九州大学における陽明学研究	5．発行年 2023年
3．雑誌名 近代日本の学術と陽明学（「陽明学」別冊）	6．最初と最後の頁 189-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤井倫明	4．巻 64
2．論文標題 朱熹的「知」与陽明的「知」ー心性論脈的「格物致知」詮釈	5．発行年 2024年
3．雑誌名 「中山大学学報（社会科学版）」2024年第2期	6．最初と最後の頁 186-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木龍太郎・藤井倫明・関幹雄	4．巻 65
2．論文標題 「読我書楼文草」翻刻研究（二）ー九州大学附属図書館蔵「吉村家文庫」の研究〔Ｉ〕ー	5．発行年 2024年
3．雑誌名 活水日文	6．最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 藤井倫明
2．発表標題 近現代日本朱子學研究流變析論
3．学会等名 臺灣師大百年校慶國際學術研討會（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 藤井倫明
2．発表標題 天地之心與生道 貫穿於宋學中的《易》思想
3．学会等名 臺灣國際儒學學術論壇勤益大學/臺灣孔子研究院學會（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 藤井倫明
2．発表標題 牟宗三の宋明思想理解ー「理」の解釈をめぐってー
3．学会等名 九州中国学会(第69回大会)
4．発表年 2021年

1．発表者名 藤井倫明
2．発表標題 艮齋學派與寒洲學派的心説論辨之詮釋――以〈心即理説〉為中心
3．学会等名 艮齋学国際学術会議（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 藤井倫明
２．発表標題 朱熹「心性論」建構與《孟子》詮釋
３．学会等名 陽明心学大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤井倫明
２．発表標題 『天』與『數』――佐藤一齋的命運觀探析
３．学会等名 中華民国当代日本研究学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤井倫明
２．発表標題 朱子《孟子》詮釋及其心性論之建構
３．学会等名 第十二回中国経学国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤井倫明
２．発表標題 西学派与艮斎学派之朱子学詮釈的異同――以「心説論弁」為中心
３．学会等名 2020年艮斎学国際学術会議（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 荒木龍太郎
２．発表標題 日本陽明学研究の変遷と吉村秋陽
３．学会等名 国際シンポジウム「東アジア儒学と陽明心学」（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 藤井倫明
２．発表標題 心は理か気か－朱子学理解の諸相
３．学会等名 国際シンポジウム「東アジア儒学と陽明心学」（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 関　幹雄
２．発表標題 三宅尚齋の著作に関する研究序説
３．学会等名 国際シンポジウム「東アジア儒学と陽明心学」（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 藤井倫明
２．発表標題 朱熹的「知」与陽明的「知」
３．学会等名 2023年陽明心学大会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 藤井倫明
２．発表標題 朱熹「格物致知」論探析
３．学会等名 中日韓朱子学学術研討会（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 湯浅　邦弘（分担執筆　藤井倫明）	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 212
３．書名 よくわかる中国思想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

他の研究発表は関幹雄「読我書樓長暦とその翻刻」（宋明思想研討会・2022）「三宅尚齋研究初探」（同・2023）「文草翻刻の現在と諸本に対する一考察」（同・2024）がある。 「活水日文」http://purl.org/coar/resource_type/c_6501 「活水論文集」http://purl.org/coar/resource_type/c_6501 「哲学年報」https://doi.org/10.15017/4772799

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤井　倫明 (FUJII Michiaki) (40867454)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	関　幹雄 (SEKI Mikio) (00817900)	都城工業高等専門学校・一般科目文科・准教授 (57601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関